聖霊降臨後第１９主日（特定２４）やもめと裁判官のたとえから学ぶこと　　２０２２．１０．１６．

今日の福音書は「やもめと裁判官」のたとえですが、このたとえ話の特徴として面白いのは、この話の目的が、いちばんはじめに出ていることです。

『イエスは、気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるために、弟子たちにたとえを話された。』　このように書かれています。

わたしたちは、テサロニケの信徒への手紙一　５章１６～１８節の言葉
『5:16 いつも喜んでいなさい。 5:17 絶えず祈りなさい。 5:18 どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。』

この有名な聖句を良く知っているので、絶えず祈らなければならないのは、当然のことと思っています。しかし、実はこの教えは、画期的なことでした。ユダヤ教では「神を絶えざる祈りで煩わせるな。１日３回より多くは祈るべきではない」と教えていたのです。

イエス様も他の聖書の個所では、しつこく祈ることを勧めておられない箇所があります。
マタイによる福音書６章７節から
『6:7 また、あなたがたが祈るときは、異邦人のようにくどくどと述べてはならない。異邦人は、言葉数が多ければ、聞き入れられると思い込んでいる。 6:8 彼らのまねをしてはならない。あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。6:9 だから、こう祈りなさい。『天におられるわたしたちの父よ、／御名が崇められますように。』

このようにして、イエス様は、主の祈りを教える前に、注意されました。
くどくど外国人のように、言葉数を多くすれば、聞き入れられるという考えは間違っている。そんなことをしなくても、神様は、願う前から、あなたがたに必要なものを御存知だ。
だから、主の祈りを唱えて、「御心が行われますように、天におけるように地の上にも。」と言われたのです。

それじゃ、どうして、「絶えず祈らなければならない。」などと言われたのでしょうか。
私が想像するのは、言葉数を多くして、くどくど祈ることを奨励しておられるのではなく、気を落として祈ることをやめてしまわないように、という教えではないか。定期的に祈りなさい。祈ることをやめないで続けなさい、と言っておられると思うのです。

そう言わなければならなかったのは、弟子たちにも、気を落として、祈れなくなったことがあったのではないかと思います。

このルカによる福音書が書かれたのは、イエス様が天に昇られてから、５０年ぐらい過ぎたころだろうと思います。その頃になると、クリスチャンたちはローマ帝国で迫害され、エルサレムの神殿もローマ軍に滅ぼされ、イエス様を直接知っている人々も少なくなっていました。

イエス様は、また帰ってくる、と言われたのに、なかなか神の国は実現しない。もうクリスチャンたちは神様から見捨てられた孤児か、やもめのように弱い存在だ、という認識があったのではないでしょうか。

ユダヤ人がよく口にする、詩編６８編には、こんな言葉があります。
『68:6 神は聖なる宮にいます。みなしごの父となり／やもめの訴えを取り上げてくださる。』

神様は私たちの味方になって、助けてくれるはずなのに、もう聖なる宮も滅ぼされた。横暴な地上の権力者が、自分たちを苦しめている。もう希望もない。という状況だったのではないかと想像します。

しかし、この福音書を書いたルカは、他の福音書では書かれていませんが、イエス様の直接の弟子たちから聞いた、「やもめと裁判官」のたとえ話を、落胆しているクリスチャンたちのために紹介しようと、今日の最初の言葉、１８章１節の『イエスは、気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるために、弟子たちにたとえを話された。』　という書き出しで、福音書に記したのでしょう。

このお話の中で、やもめは「相手を裁いて、わたしを守ってください」と訴えています。当時のやもめが生活を脅かされることと言えば、「夫からの遺産の土地を奪う者が現われたり、死んだ夫の借金のために彼女の子供を売りとばすことになったり」などが代表的なものだったようです。

このようなやもめが、生活を守ってもらおうと、裁判官に訴えるわけです。その裁判官は、神を畏れず人を人とも思わない、冷淡な人物ですが、やもめには戦う手段がありました。「うるさくてかなわない」と、裁判官が根負けするほど、気を落とさずに訴え続けたのでしょう。あの冷淡な裁判官でさえ、聞いてくれるくらい熱心に要求すれば、それは受け入れられるんだ、とイエス様は教えたのです。

そして、その後で、裁判官を神様と比べています。

『18:6 それから、主は言われた。「この不正な裁判官の言いぐさを聞きなさい。18:7 まして神は、昼も夜も叫び求めている選ばれた人たちのために裁きを行わずに、彼らをいつまでもほうっておかれることがあろうか。18:8 言っておくが、神は速やかに裁いてくださる。』

迫害のために、救いを叫び求めているクリスチャンたちのために、神様が速やかに審判を下してくださるだろう、とルカはイエス様の口を通して励ましているのです。
だから、気を落とさずに絶えず祈らなければならない、というわけです。

それでは、祈ったなら、何が与えられるのでしょうか？
願いはすべて叶う、というのではありません。先ほど言いましたマタイによる福音書のイエス様の言葉、『あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。』（マタイ６：８）

神様は、私たちに必要なものを、必要な時に、与えてくださるということです。「求め続けたら、それは聞いてもらえるのだから、ごり押ししなさい。」というような、甘えの話ではないのです。

３年前、延岡で話したのですが、皆さんは、「叶えられた祈り」という有名な祈りをご存じでしょうか？

南北戦争の時、ある兵士が祈った祈り、と言われ、ニューヨーク州立大学病院の壁に落書きされていたようです。

「叶えられた祈り」
“大きなことを成しとげるために力を与えてほしいと神に求めたのに
　　謙遜を学ぶようにと弱さを授かった
より偉大なことができるようにと健康を求めたのに
　　よりよきことができるようにと病弱を与えられた
幸せになろうとして　富みを求めたのに
　　賢明であるようにと貧困を授かった
世の中の人々の賞賛を得ようとして成功を求めたのに
　　得意にならないようにと失敗を授かった
人生を享楽しようとあらゆるものを求めたのに
　　あらゆることを喜べるようにといのちを授かった
求めたものは一つとして与えられなかったが
　　願いはすべて聞き届けられた
神の意に添わぬ者であるにもかかわらず
　　心の中で言い表せないものはすべて叶えられた
私はあらゆる人の中でもっとも豊かに祝福されていたのだ”
（南北戦争のある兵士の祈り、ニューヨーク州立大学病院の落書き）

この祈りは、「求めたものは一つとして与えられなかったが、願いはすべて聞き届けられた」というところに、結論があり、神様は私たちのために、求める以上の素晴らしいものを与えてくださる、ということなのだろうと思います。

わたしたちは、こうあってほしい、という願いをいつも持っています。でもそれはなかなか与えられない、叶えられないことが多いのですが、神様には、お考えがあって、私にそれを与えられなかったのだ、という気持ちになることが大切でしょう。ひたすら、真摯に神様に向かって祈りを続ける時、私に本当に必要なものが思いがけない祝福として与えられることを、この祈りは教えているように思えるのです。

しかし、もし何も求めようとしないなら、神様が必要なものを与えてくださっても、私たちは気づかない、ということがあるのではないでしょうか。

気落ちせず、願い続ける時、私たちにとって思いがけないことでも、神様からの応答を感じ取れる者に変えられているのではないか、と思います。